不可解な３つの光跡

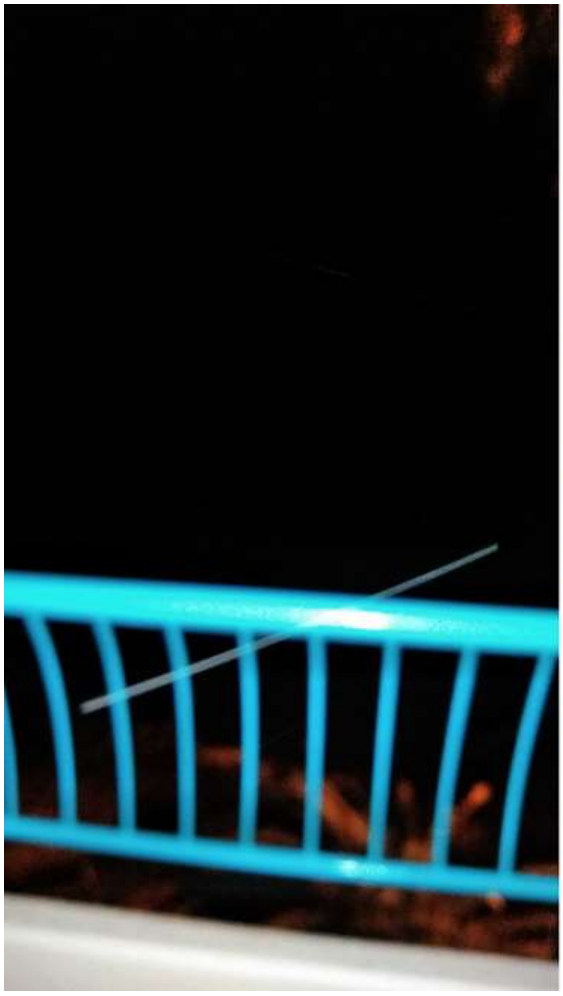
益子祐司

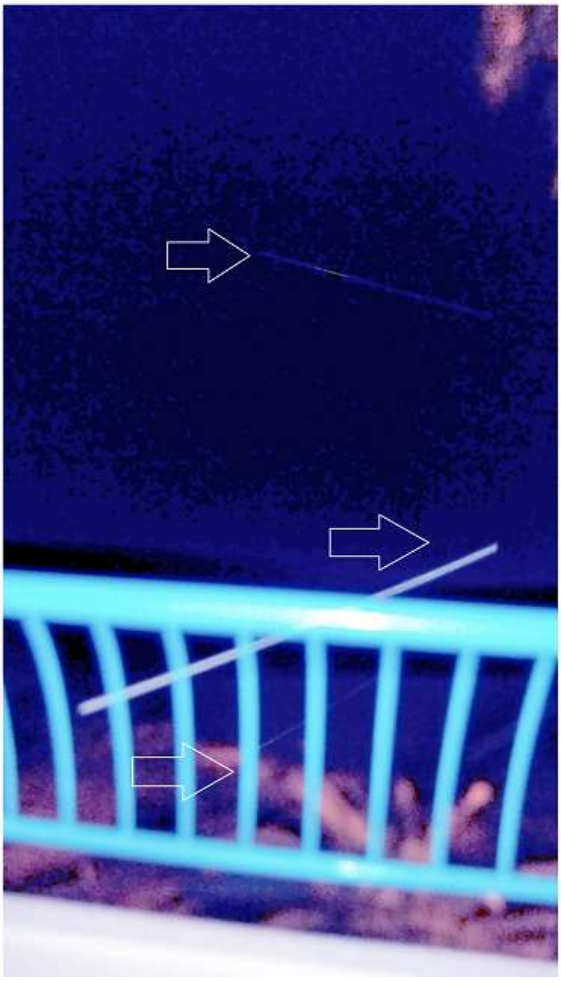
2018 年 12 月 25 日クリスマスの夜、私は千葉県房総沖の海岸から太平洋を一望する 4 階建の建物の最上階バルコニーにおいて、前日から徹夜のＵＦＯ観測を試みていた。その 2 日目、いまだ出現の気配のない空を見上げながら、携えていたビデオカメラを置いて小休止し、状況をメールで尋ねてきた友人にスマートフォンから返事をしようと思った私は、成果のない知らせだけでは淋しいので、撮影場所の写真を添付しようと考え、室内の照明を全て落とし、スマートフォンのカメラでバルコニーのフェンスから望む海岸と夜空を撮影した。すると、空間を切り裂くような鋭く青白い閃光がモニター画面に写った。全く予期せぬ突然のことに、私は思わず心の中で「ワッ！」と驚きの声をあげた。

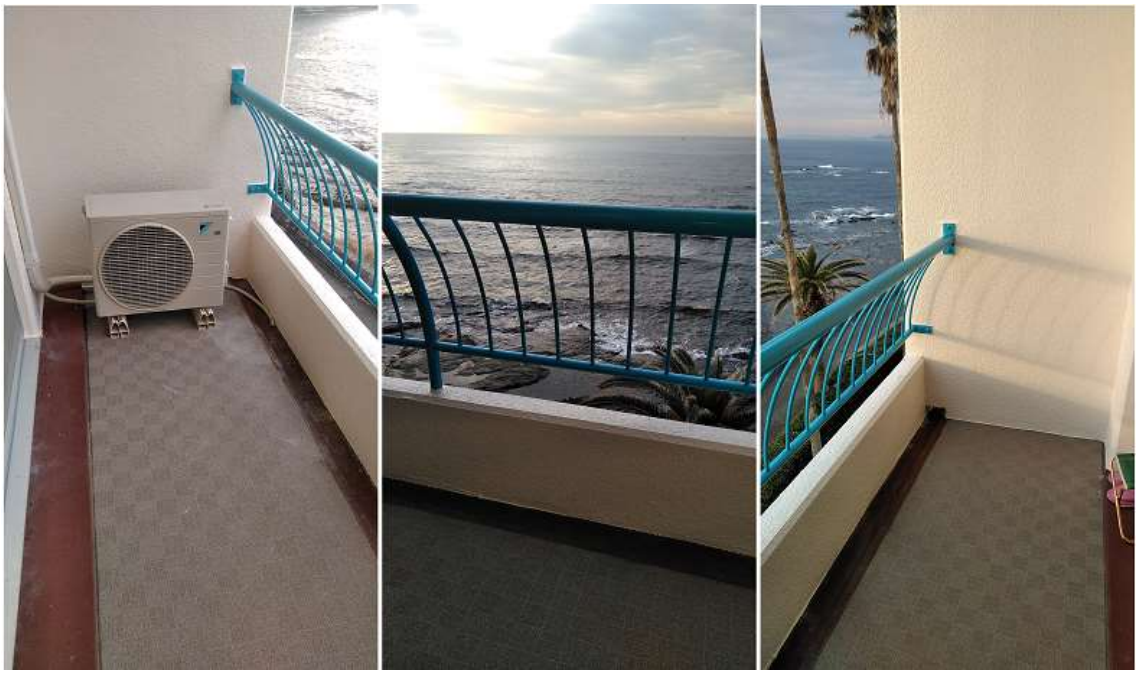
現れた写真を見ると、カメラのストロボフラッシュに照らされて明るく写ったフェンスを右斜めに貫くように青白い細い光跡が真っ直ぐに写っていた。そしてさらによく見ると、その**光跡の上空の空と、下方の海面の上にも、うっすらと細い真っ直ぐな光跡がそれぞれ異なった角度で写っていた**のである。

不思議な３つの真っ直ぐな光跡

以下がその写真であるが、上空と海面上の光跡が見やすくなるように調整した画像（ブルー成分と明暗レベルを上げたもの）を右に添え、３つの光線を白い矢印で示した。撮影時刻は 18 時 54 分である。写真の右上と右下に、建物の照明に照らされた樹木の葉が見えるが、双方とカメラからほぼ同じ距離で、フェンスに近い空間にある）。左下のオレンジ色の模様は、急傾斜の岩だな（岩盤）で、一番下の光跡の背景は海であり、手すりの上に見える平らな黒い部分は水平線である。カメラと手すりの距離は 110 センチ前後で、フェンスは外に向かって湾曲しているので、手すり部分はカメラに向かって少し突き出ている。バルコニー自体はマンションと同様の区切られた空間である。昼間（午前 7 時 34 分）の写真も添えておく。







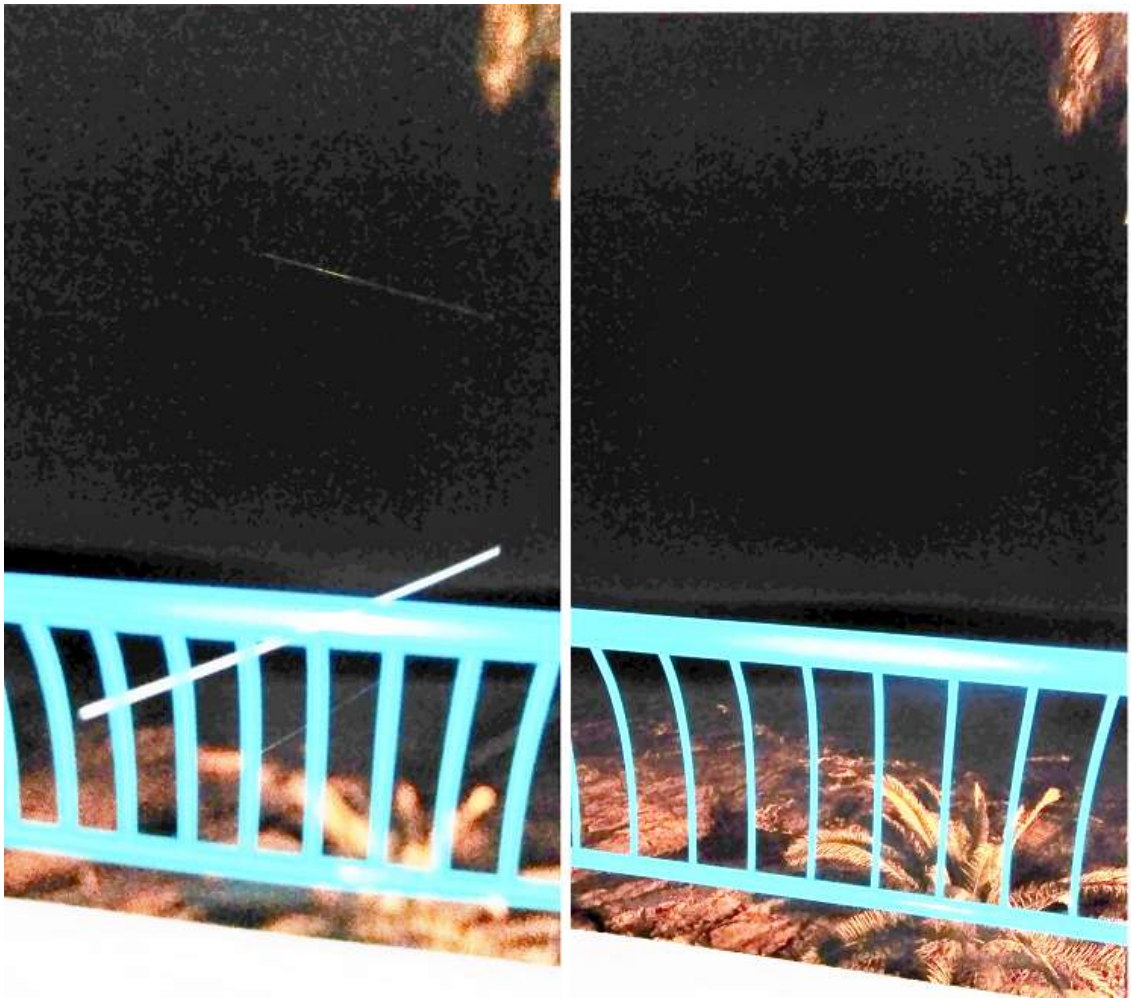
撮影場所は、傾斜した岩盤の前にある建物の４階バルコニーで、太平洋を一望できる房総半島の海岸沿いにある（以下のグーグル写真の矢印部分）。

虫ではありえない

最も明るい中央の光跡の正体について、まず私が冷静に考えたのは、ストロボに照らされて光った虫の動き（いわゆるスカイフィッシュとして知られるモーションブラー現象）もしくは、デジタルカメラに起こり得る光学的なノイズの現れである可能性であった。しかし**ストロボの閃光時間は長くとも千分の１秒（スマホではおそらく数万分の１秒）**であるため、仮に羽根の痕跡が写りにくいこともある小バエがレンズの至近距離を**わずか 10 センチだけ飛んでいたとしても、最低でも時速 360 キロ以上**となり、小バエの最高飛行速度とされる時速 15 キロを遥かに超えてしまっている。バルコニーの手すりに反射した光によるスミアやブルーミングのような白飛びはなく、水平や垂直の線にもなっておらず、そもそも、それらの現象を引き起こすには手すりの反射光の大きさが不足しているため、原因すら存在していない。撮影時の空は快晴で、雨は降っていない。そもそも、３つの異なった角度の真っ直ぐな光跡を３匹の虫がほぼ同時に描くことがあるだろうか。バラバラな角度の３つの直線が現れるデジタルノイズ等も見聞きしたことがない。これらが虫であろうと疑いを持つ人は、次の質問にどう答えるだろうか　－　「中

央の光跡が虫によるモーションブラー現象だとすれば、それはストロボ光を反射したことになる。**仮に千分の一秒内に 1 メートルの光跡を残したとすれば、その速度は時速 3600 キロにもなる**。ストロボの閃光時間にこれだけ長い光跡を残せるほど高速飛行できる虫は存在するだろうか」

私は、ＵＦＯとされる国内外の写真やビデオの 99%は誤認か作り物だと長年の経験から熟知しているため、徹底的に懐疑的な見方であらゆる角度から検証をしたが、このような写り方をする原因は見つかっていない。スマートフォンの製造元にも画像を見てもらったが、判断がつかないとの回答が返ってきて、本体を検査しなければ分からないとのことであった。私は１分以内に同じ角度で写真を撮影し、前後８回ほど撮影しているが、以下のように、光跡を写したもの（左）と１分以内の再撮影写真（右）を比較しても、**再撮影したものには何も写っていない**ので、機器の故障や、現場に常にある物体である可能性はないといえる。



なお、スマートフォンのオート設定での撮影であるため、偶然の複数の流れ星の光跡を写し込むことはかなり難しい。それから、言うまでもないことだが、写真はストロボ発光を伴う通常のオート撮影であり、決してシャッタースピードを遅くして露光時間を長くすることで何かの光を細長い光跡として写したものではない。カメラのストロボ閃光の反射が見られることがその証拠の一つである。この画像の撮影時の添付データは、

1/11 秒、f 2.2、3.46mm、ISO 1001　KYOCERA 602KC であり、証拠にそのモニター画面を以下のように別のスマホで撮影してある。

ピントはどこに合っているのか

さて、これからのさらなる検証は、撮影の仕事に携わっていたプロフェッショナルや、カメラに精通した人物の共通した見解をベースにして、カメラの知識が不十分な私の自己流の推測を訂正してもらった上での、**専門家レベルの見解である**が、そのような人たちであっても、まだ**いくつかの謎が残る不思議な画像**であるというのが、現時点でのおおまかな見方である。

光跡が写り込んだ写真は、その直後に写したものと比較すれば明らかなように、大部分がピンボケになっている。けれども、その上空と下方に、非常に細い直線の光跡が写り込んでいるのだ。これは、これらの光跡にカメラのピントが合っていることを意味する。**最もピントが合っているのは、上空の光跡を残した飛行物体**である。暗く広い空間で遠くに飛行物体を感知し、それにピントを合わせようと作動した場合、レンズの絞りは当然、解放状態となり、撮影時の感度も高く設定される。無限遠付近にピントが合った解放状態のレンズで撮影すると、手前は大きくボケ、ピントが合っている箇所も、ある程度解像度が落ちる。感度がかなり高く設定されているので、画質は荒れ、演算処理上の不具合も起きやすくなる。これらが全て今回の画像に見て取れるので、上空の光跡に最もピントが合っているといえるのである。

実はこのようにフェンスがひどくピンボケした写真はこの時のカットだけであった。この直後に、同様の構図で撮影した６枚の写真は、わざと手ブレで写したものも含めて、いずれもフェンス付近にピントが合っていた。その理由は、**カメラが飛行物体に反応する必要がなかったため**、手前のフェンスを含むバルコニー付近にピントが合ったからである。直後に撮った写真は、ピントは下の樹木の葉より、手前のフェンス側に合っている。被写体が近く、ストロボ光の明るさが充分な効果を上げているので、レンズの絞りも締まり、解像度も上がって、きりっとした描写になっている。

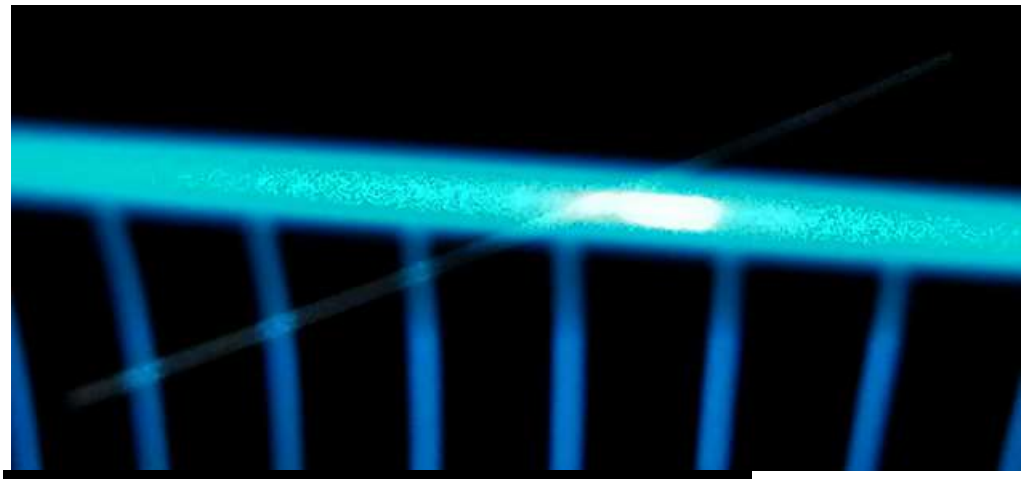
下方の飛行物体の光跡は、周囲の状態と一体感があり、樹木の葉に近い空間を飛んでいる（周囲の葉などとボケ具合が同質である）。

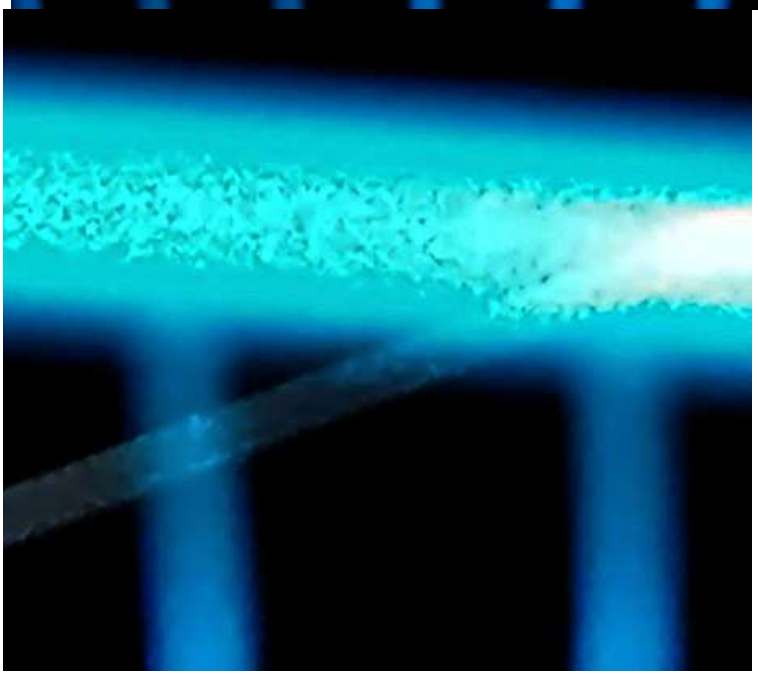
３つの飛行体の位置と明るさについて

中央の光跡について、私は当初、それがフェンスの手前と背後のどちらを飛んでいるのか判断に迷ったが、以下の点から、**フェンスの手前を飛んだものである**ことが分かった。

(1)　光跡がフェンスの縦横すべての棒の上に、明晰に記録されている。最も太い横棒（手すり）の上にも明確に長く記録されており、背後と考えるのは無理である。

(2)　フェンスの手すりの最も明るいストロボ光の反射部分に、光跡が通過したことによる反射光の引きずり部分が両側に短く現れている。光跡が背後だとすれば、このような現象はあり得ない。





また、微細な点ではあるが、光跡は真っ直ぐなように見えるが、手すりと交差しているあたりで、わずかに左に逸れている。実は昼間のバルコニーの写真を見て分かるように、フェンスは外側に湾曲しており、手すり部分が内側に突き出た形になっているのだ。つまり、光跡がわずかに曲がっているのは、飛行物体がフェンスを超えて空へ向かう際に、

手すりを軽くよけて飛んだからかもしれない。光跡は右上に向かうにつれてやや細くなっており、その輪郭は、ボケて膨らんだというよりも、被写体の速い動きによって引きずられるようにブレたように思われる。遠近法的に見れば、先細りの光跡は、カメラから遠ざかる方向へ飛んでいるように見える。

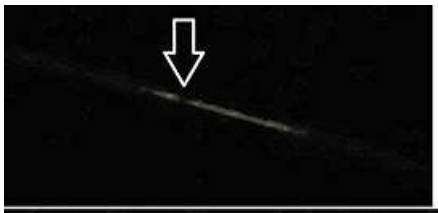
もし、飛行物体が手すりをかすめるように手前を通過していたなら、手すりの直径（約5センチ）から判断して、飛行物体の大きさは1.5センチ前後と推測される。そうすると、光跡の長さは1メートル前後になるが、光跡がストロボ光の反射であるなら、その**閃光時間内に1メートル移動する速さは最低でも時速3,600キロ**にもなる（手すりとカメラの距離は110センチ前後）。ちなみに私はバルコニーと室内の境目からスマホをフェンス方向へ出して撮っており、窓ガラス越しの撮影ではない。撮影前はサッシ戸を閉めて室内で食事をしていたが、撮影時に部屋の照明は全て落としている。バルコニーにはエアコンの室外機だけがあるが、一度も作動させていない。

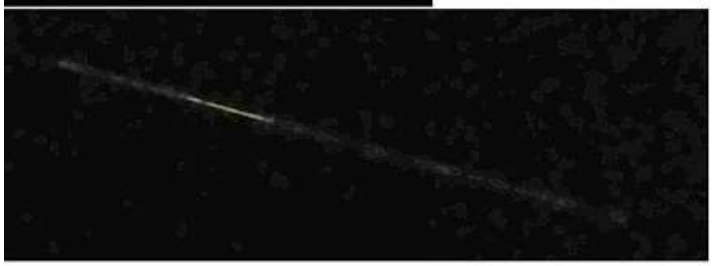
次に、光跡の明るさについて検証する前に、あらためて留意してほしいことは、ストロボ発光で撮影した場合には、シャッターが開いてから閉じるまでの間の、ほんの一瞬の間だけストロボ光が被写体を照らすということである。言い換えれば、シャッターが開いている間、被写体がずっと光っているわけではないのである。今回の光跡写真のシャッタースピードは1/11秒で、その中におけるストロボの閃光時間は、最も長くても千分の1秒、実際は1万分の1秒かそれ以下であると推察される。つまり、光跡が反射光だとしたら、ストロボ光を反射した光跡と、発光終了後からシャッターが閉じるまでの弱い光跡との、明暗が異なる2種類の光跡がつながって見られるはずである。

もし中央の光跡が、ストロボ光の反射によってできたものであるとすれば、ストロボの発光後の光跡が全く見られないことの説明ができない。つまり、シャッターが閉じるまでの光跡が無いことの説明ができないのである。したがって、**中央の光跡は自ら発光する飛行物体が残したものである**といえる。

下の写真は、明るさ補正をしたもので、始点の写真はシャープネス処理をしたものである。

次に上空の光跡の画像を検証する。下側の写真は、画像を限界まで拡大して解析度を挙げたものである。

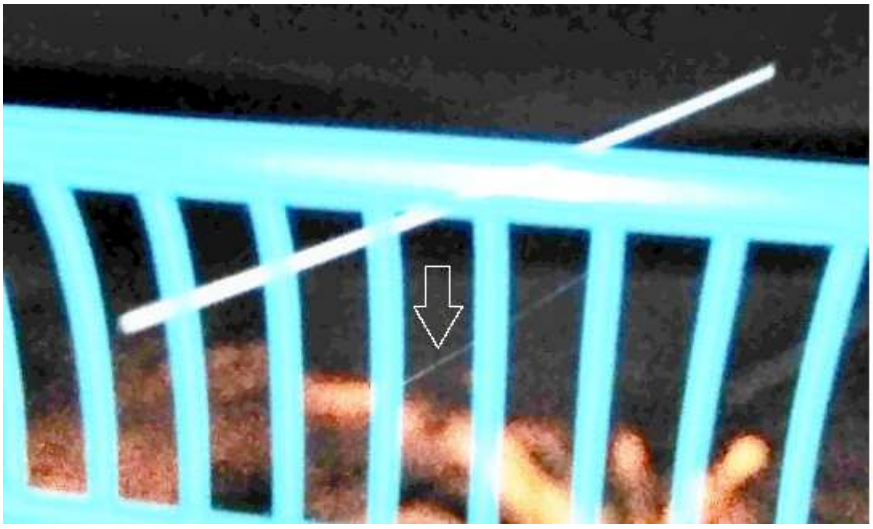




上空の光跡の一部分が明るいのは、ストロボ光の反射と考えられるが、明るい部分の一部が途切れている理由が不明である。ストロボ光の反射である場合、飛行物体の速度がかなりなものだということの理解が必要になる。そして、途中だけが明るめの光跡を残した**上空の飛行物体も自ら発光している**といえる。

最後に、下方の光跡の飛行物体（明度を上げた以下の写真の矢印部分）についてだが、前述の２つの光跡と同様の理由により、**下方の飛行物体も自ら発光しながら飛行している**ものであるといえる。この光跡には上空の光跡のような明るい部分がないので、ストロボ発光の直後に飛行を開始したのではないかと思われるものの、それを裏付けるほど

明確な証拠はない。３つの光跡の出現に時間差があるのか無いのかを断定できるほどの確かな要素は見当たらない。



よく見ると下の光跡は、画面上では、海に面する岩盤の上を海上に向かって進みながら、見かけ上の距離の水平線まで伸びているように見える。かなりの高速飛行をしていることは確かだが、光跡の長さが良く分からないため、移動距離や速度の予測は難しい。

そもそもビデオでは撮影が難しいものであった

私は常々、ＵＦＯの証拠は、その動きが分かるビデオ映像が望ましく、静止画の場合は肉眼での目撃証言に頼る部分が多くなる反面、誤認や思い込み、あるいは意図的な創作や偽造も比較的容易になるという問題点を指摘してきたのだが、今回は携帯したデジタルビデオカメラを長時間にわたって構えていた間に撮影の機会は訪れなかった。

今回の光跡を残した物体は、カメラからの距離は定かではないものの、持参していた私のビデオカメラ（1 秒間に 60 コマ、つまり 1 コマ 0.017 秒）で撮影していた場合、シャッタースピードの時間内（1/11 秒は 0. 09 秒になる）に長い光跡を残す物体が記録さ

れるのはわずか 5 コマほどしかなく、代わりに超ハイスピードのビデオカメラを使用しない限り確認できない速さであった。つまり、今回の撮影は、私としては全く意図しない偶然的な出来事であったが、手持ちのビデオカメラよりは、スマートフォンで静止画を撮る方法のほうが適していたものであったのだ（写真専用カメラは持参しなかった）。しかし今後は、ハイスピードかつ高画質のビデオカメラの用意を検討しなければいけないのかもしれない。

不可解な撮影記録

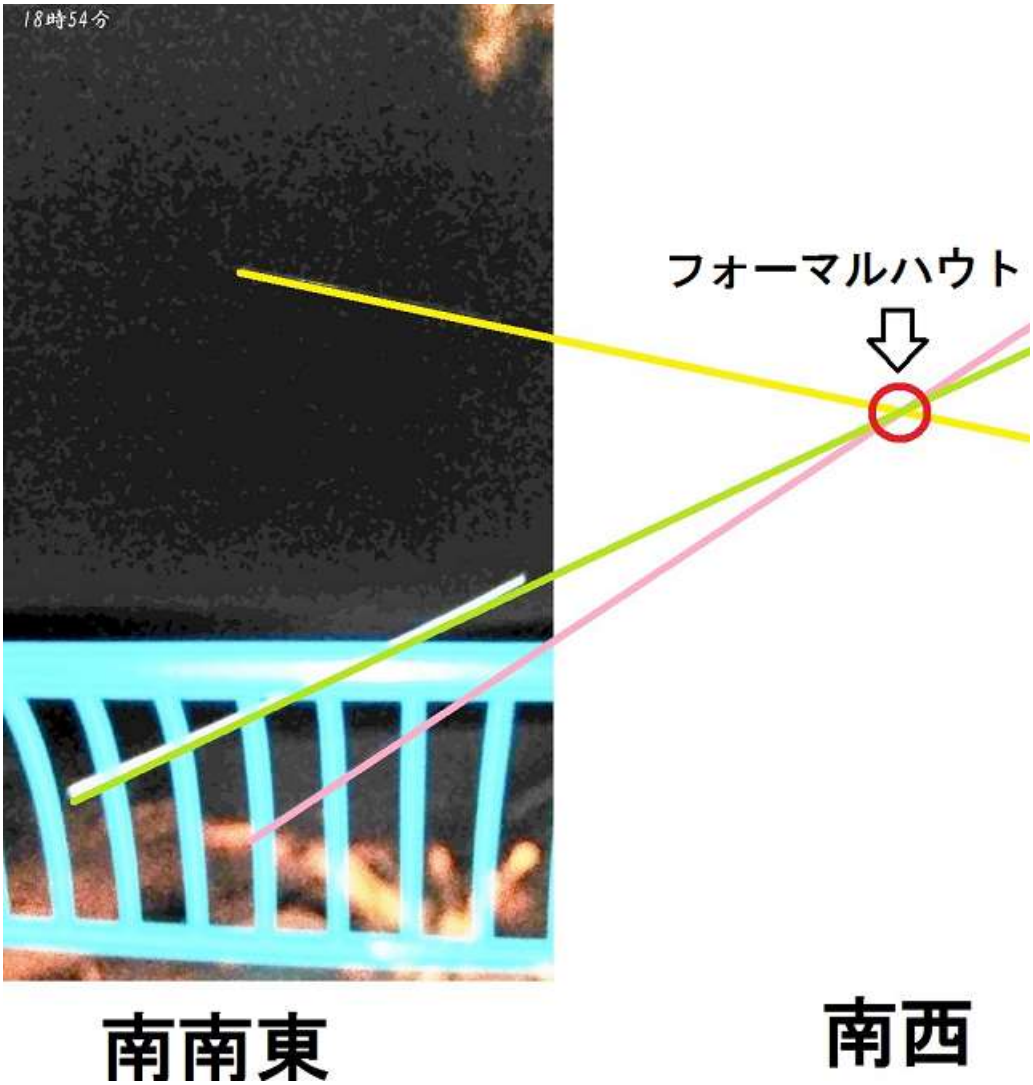
気づくのが遅れてしまったが、写真画像の状況等が記録されているメタデータに非常に不可解な記述があった。光跡の写った写真と、その 1 分後の写真のデータは、「フラッシュなし（自動）」という記録になっていたのだ。つまり、撮影データの上では、ストロボ発光がなかったことになっているのである。7 分後と 8 分後のピントが合った画像は、フラッシュ発光の記録がきちんと残っている。以下の連続写真を見ると、左から 2 番目の 1 分後の写真は（左端の光跡写真よりは程度の軽い）ピンボケになっているのがわかる。その右側の 7 分後と 8 分後の写真には、ピンボケによるフェンスや反射光の膨張は見られない。

これはスマホの記録エラーである可能性が考えられるが、その後に私が自宅のバルコニーで繰り返しテスト撮影しても、記録エラーは一切発生しなかった。はたしてこのようなエラーは起こり得るものなのだろうか。米国のＵＦＯ研究団体の解析担当者に今回の連続写真を見せ、メタデータの記録の矛盾について質問したところ、「記録エラーの可能性があるが、私はこれまでエラーの事例を見たことは一度もない」とのことで、説明がつかない画像であるとの結論であった。
今回の写真は、プロの撮影カメラマンも「フェンスの反射光は典型的なストロボ光によるもの」と述べているが、前述したように、撮影の際は室内の照明を全て落とし、暗闇のバルコニー（ガラス越しではなく屋外）で、ストロボ光だけで撮影したものである。仮に（撮影時に消していた）室内照明の点灯を想定しても、以下のように天井照明はフェンスの左寄りに当たる

ただし、この記録データの矛盾については、エラーの発生の頻度が現時点では確認できていないので、現実離れした憶測（カメラが何者かに遠隔操作されていた可能性の推察など）は控えたい。

３つの光跡の延長線が交差する１点にあったもの

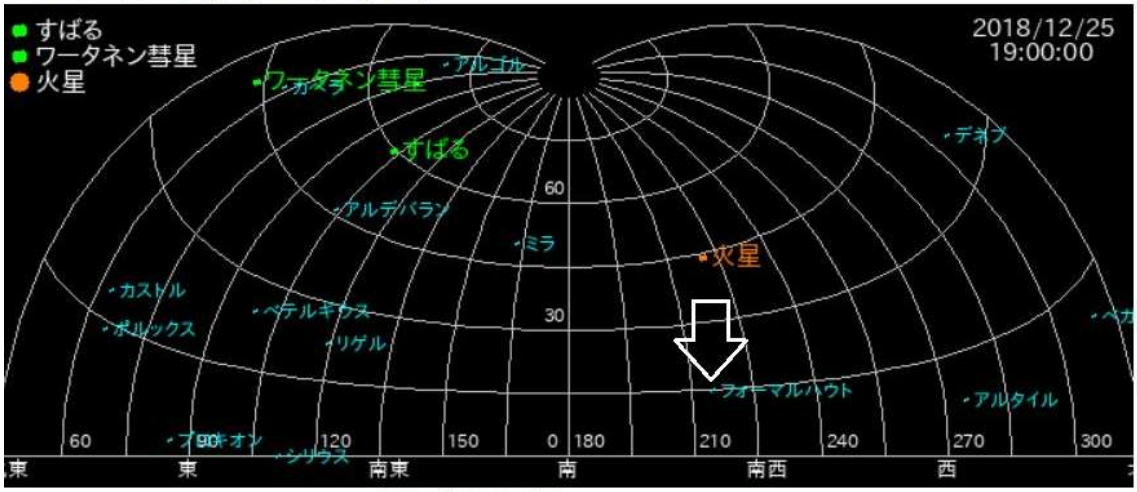
ところで、これは平面上の偶然かもしれないが、驚いたことに、**３つの光跡を延長させると、ほぼピッタリと１点で交わっている**のだ。そしてさらなる偶然として、空に数個しか見えない明るい星の中で、光跡の交点とほぼ同じ位置に一等星（フォーマルハウト）が輝いていたのだ。



千葉(千葉県)　国立天文台の暦計算サイトより

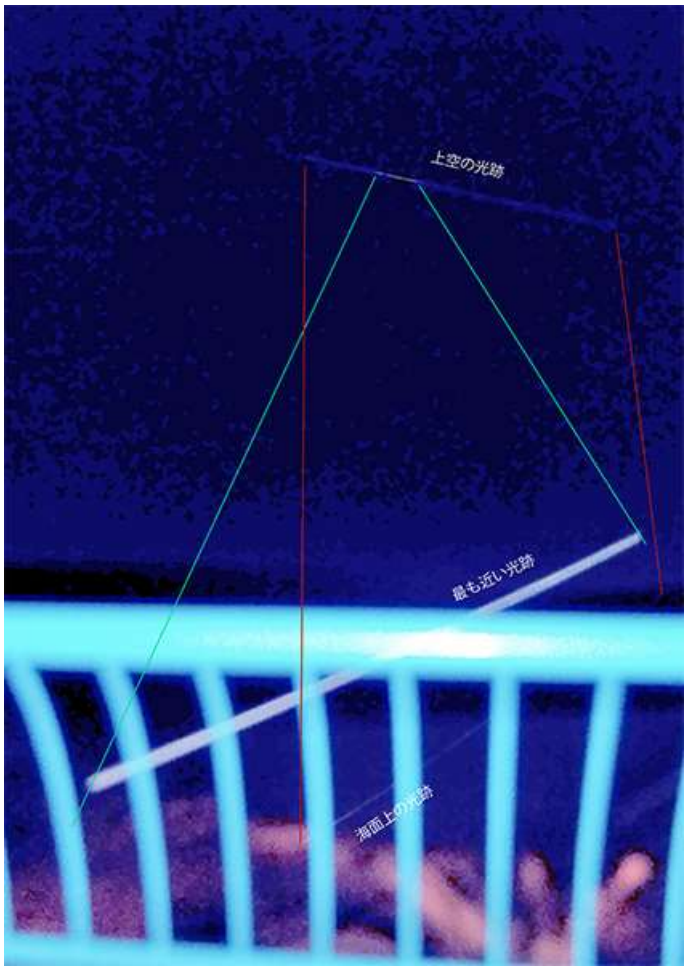
緯度:35.6000° 経度:140.1167° 標高: 0.0 m 標準時:UT+9^{h}

2018年12月25日(火) 19時00分00秒



フォーマルハウトは南西の空の低い位置（みなみのうお座）にあり、地球から 25 光年ほどの比較的近いところにある白色星で、2 億年ほど前（地球の恐竜時代）に誕生した恒星であるという。また、２つの伴星をもっているというが、今回の他の 2 つの光跡と何か象徴的な意味合いがあるのだろうか。もしこれらの一致がすべて偶然ではなく、意図的なものであったとすれば、**3 つの飛行物体が連動して動いていた可能性**もでてくるわけだが、万が一そうだとすれば、上空の光跡に明るい部分が 2 つあることは、他の 2 つの飛行体との連携に何か関係していたものなのだろうかと、私は思わず空想してしまいそうになった。

今回の写真の３つの光跡の始点と終点、および明るい部分どうしを線で結ぶ位置関係と以下のような位置関係になる。光跡を描いた飛行体の間で何らかの関連性や、光跡を描く順番などがあったのだろうか。



今回の観測にいたる経緯

今回の出来事に関しては、写真撮影にいたるまで、いろいろと不思議なことや偶然の出来事もあったのだが、曖昧さを排除するために、ここでは客観的な視点から検証をしてきた。ただ、そもそも、なぜこの房総の地でＵＦＯ観測を行おうとしたのかについて、説明しておく必要はあると思う。実は筆者はこのエリア（勝浦～鴨川の海岸および清澄山）を 4 年前（2010 年）の 11 月にも訪れてＵＦＯ観測を行っている。その際はＵＦＯの目撃も撮影もなかったが、清澄山において、非常に不思議な体験をしている（これはＵＦＯではなく、異星人との遭遇という、かなり現実離れした話になるので、ここでは触れない）。

直接の訪問理由は、その前月（2014 年 10 月）において、日本最古（？）のＵＦＯ事件の地とされる鎌倉の某所で、その記念に建立された寺の門をビデオで記念撮影中に、高速（時速 80 キロ以上）で門をくぐりぬけて、その先の石段の上空を飛び、数十メートル先の高い地面の上に着地した光体（小型ＵＦＯ）を撮影したからである。その光跡を綿密に調べたところ、驚くべきことに、その数カ月前に北海道の十勝岳で夜間に、星空をテスト撮影中に偶然にビデオに収めたジグザグ飛行の青白い発光体の光跡と、方位も含めて完璧に一致していたのである。さらにいえば、十勝岳でＵＦＯ出現前に、誰もいない深夜の森に突然に一人の女性が姿を現し、少し目を離した瞬間に忽然と消えてしまったのだが、その数カ月後の寺院で再びＵＦＯを撮影する際に、非常に良く似た女性が

再び似たような服装で姿を見せ、寺院の門をくぐって石段を上る彼女を追うようにＵＦＯが飛来したのである。十勝岳ではその女性が見ていた方向からＵＦＯが飛来した。以下は十勝岳のＵＦＯと鎌倉のＵＦＯの光跡比較である。女性の後姿も写っている。少し日本人離れした、清楚で高貴な顔立ちの美しい人であり、年齢は 30 代のように見え、長いズボンを履いていたのに、なぜか高いハイヒールを履いていた。あえて言えば、その後に清澄山で遭遇した不思議な女性も、ハイキング客しかいない山奥の渓谷の中で、なぜか正装をして綺麗なハイヒールを履いていたのである。

あいにく私は宗教には深い関心を寄せてはいないのだが、ＵＦＯを撮影した寺院が日本の有名な僧に関わるものであり、その人物を幕府による斬首刑から救うために不思議な光体が飛来したというＵＦＯ事件のことを初めて知り、その僧が修行をしたという千葉県の清澄寺と、その誕生の地である近くの勝浦の海岸を訪れることにしたのである。もしＵＦＯとその僧が関連するものであるなら、何か象徴的な出来事に遭遇できるのではないかと思ったからである。そして今回、私が勤める職場から早めの年末休暇を取ることができたため、勝浦海岸に隣接する海岸の建物のバルコニーで 2 日間をかけてＵＦＯ観測を試みることにしたのである。以下の写真は、現在は海底となっているその僧の生誕地の方面を今回の観測地から写したもの。

私は、神話や伝説等にもあまり興味はなく、偶然の一致や象徴的な出来事というものも、単に多くの選択肢の中から関連のあるものを選んでいるだけに過ぎないだろうと思っているので、あまり重視していないのだが、知人の提案で、今回撮影した光跡の方向性に何か意味があるのか考えてみたところ、中央の光跡のラインは、今回の撮影地と、十勝岳でのＵＦＯ撮影地を結ぶ線と同じ方向であり、今回撮影した一番上の光跡の角度は、上記の僧の生誕地（今は海底となっている）とを結ぶ角度、および鎌倉とを結ぶ線と同じ角度であった。

今回、懐疑的な検証のために、さまざまな種類のデジタルノイズや光学的な現象についてインターネットで画像検索をして、よくあるレンズゴーストやレンズフレアを神秘的

な現象として解釈付きで紹介したり、雨粒や走査線によって生じた光線写真を霊的現象と鑑定したりなど、基本的な知識すら欠如あるいは無視した解釈を非常に多く目にしたが、ようするに「勝手なことを言ってもバレないだろう」という気持ちがどこかにあるから言えることなのだろう。そういう人たちと一線を画すため、私は自分のレポートを客観的な目線での報告にするつもりである。ただ、幼少時から始まっている私の身に起き続けている不思議な体験や遭遇の出来事を通して感じていることは、非常に巧みで、かつ必要最低限の干渉によって、自身の意思だけではない存在（いわゆる霊的な存在というよりも物理的に存在する地球外生命体）によって導かれていることである。それをコントロールと呼ぶか、ガイドと呼ぶかは、慎重に見極めなければいけないとも思っている。両者のケースが確実に存在していると思われるからである。

私の場合、UFO との遭遇においては、常にある意味で〝裏をかかれる〟ことが連続している。最初は、東から西まで水平線が見える海辺が良いだろうと考えて、誰もいない冬の海で待機していたところ、背後の山の方からオーロラ色の光体が頭上に現れて、そのまま旋回して背後へ去っていったため撮影ができず、残念に思った私は、光体が向かった方向にある山の頂上で朝から待機して、空の全方向を見張っていたところ、なんと今度は眼下の谷間から光体が垂直に上昇してきて私の目の前に空間で一瞬だけホバリングし、その直後にスポーンと上空へ垂直に飛び去っていった。

次の十勝岳では、5 泊 6 日のキャンプを組んで、まず初日は星空の写り具合を全方向で 5 秒ずつチェックしようと天頂にカメラを向けて固定したままカウントを始めた直後にジグザグの光体が頭上を横切り、私はそれを追うことも忘れていた。しかしカメラを固定していたおかげで、航跡が正確に撮影できた。その次の浜辺での観測では、2 日間の徹夜でも何も成果が出ずに帰途につき、電車に乗る前に記念撮影用に立ち寄った場所で写した最後の動画にジグザグ飛行の高速 UFO が写り込んでいた。そして今回、ビデオカメラの予備バッテリーを 2 個用意して万全の体制で臨んだ観測では、撮影場所を撮るために持ち出してスマホの写真 1 枚に不可解な３つの光跡が写り込んだのだった。UFO との遭遇には、いつ何が起きても対応できるような心の準備が必要なのかもしれない。

益子祐司（ましこゆうじ）

著述家、翻訳家、詩人

幼少時から最近までコンタクト体験を重ね、同時に人間の進化に関する独自の感覚と予感を抱き続けているが、確実なことが証明できるまで、懐疑的かつ中立的な姿勢を貫いている。

著書：
『ＵＦＯと異星人』
『ＵＦＯは来てくれた』
『アダムスキーの謎とＵＦＯコンタクティ（学研）』ほか

翻訳書：
『スターピープルはあなたのそばにいる（上下巻）』（アーディ・Ｓ・クラーク著）

『私はアセンションした惑星から来た』（オムネク・オネク著 ）ほか

ホームページＵＲＬ：http://emerald.holy.jp/

Youtube 動画：https://www.youtube.com/channel/UCPQShmCMhJN10h1pEN5r16Q/videos